NIE特集
Newspaper In Education
毎月第2・4火曜日発行

木町通小

学校名　仙台市立木町通小学校　　校長　関一男
所在地　仙台市青葉区木町通１の７の36　　児童　452人
電話　022（223）3480

晩翠先生の校歌 誇り

学校と町の歴史に迫れ！

知り隊

明治六（一八七三）年にできたわたしたちの木町通小。幼稚園発祥の地であり、仙台市の「四番小学校」として設立された歴史の深い学校です。後に改められた「培根小学校」という校名には、「土深くその根が育ち、やがて幹が太くなって枝を伸ばし広げるように大きく成長してほしい」という「培根達支」の願いが込められています。さらに、ユニークな校歌や、地区の歴史について調べて、木町通小の魅力に迫りました。

学校ができた当時は、校歌がなく、子どもたちは代わりに軍歌を歌っていたそうです。しかし、昭和二十二（一九四七）年に昭和天皇陛下がおいでになるにもかかわらず校歌がなかったので、本校出身の土井晩翠先生が作詞をしてくださいました。

その後、作曲者の福井文彦さんが「戦後だから明るい歌に」という思いを込めて「ララ」という歌詞を付け加えました。楽しい雰囲気で歌うことのできる曲調と、世界にも目を向けたスケールの大きい歌詞。わたしたちは歌うたびに校歌への愛着が増しています。

「昔は市電が通っていて、とてもにぎわっていた」と話す、かまぼこ店の佐々木和男さん（右から2人目）

活気あふれた街道筋

木町通地区には江戸時代に幕府が定めた五街道の一つである奥州街道が通っており、今でも歴史のある商店がたくさんあります。そこで、五年生が総合的な学習の「弟子入り体験」でもお世話になっているお店「かま栄かまぼこ店」と「鳥津綿店」に行って、木町通地区の歴史について取材をしました。

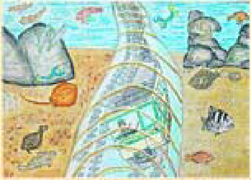
今のようにビルやマンションが立つ前は、通りにたくさんの商店が並んでにぎわっていたそうです。昭和二十（一九四五）年の仙台空襲による被害も多くありました。戦時中には国道48号線に戦車が通ったり、便利な仙台市電が走っていたことなどを教えていただきました。お店の方々は、「木町通学区は、バスや地下鉄、病院があってすごく便利。でも都市化が進んで、人が減ってきているようだ」と昔の商店街の活気を懐かしく思い出しているようでした。

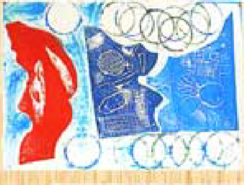
◇　◇

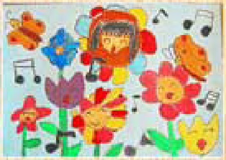
木町の歴史に触れてみると、わたしたちが地域に誇りを感じ、自分たちにできることを考えていかなくてはならないことを痛感しました。「伝統ある『培根魂』」を胸に、在校生が一丸となって新たな歴史のページを重ねていきたいと思います。

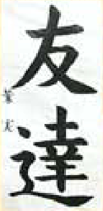
文・菅野創太、田口大貴、遠藤伝、井上栗穂、阿部由弥、井上敬貴、北畠寛之、鈴木匡兵、中野杏香（卒業生）

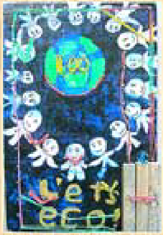
うきうきキャンバス


仙台港の海底を走る地下鉄
卒業生・阿部敦也


丸で囲まれた海
5年・須田智瑠

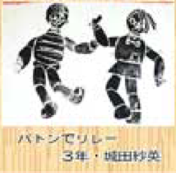

おはなといっしょに
うたうわたし
2年・片上玲香


習字「友達」6年・白岩栞実



世界のみんなを
守るためエコしようよ
4年・岩見夏希

共同制作
「思い出を気球にのせて」
6年・山下紘生　5年・大西一平
5年・小和田竜央　3年・山田遼太


バトンでリレー
3年・城田紗英

教え隊

自校給食

自慢の給食メニューの一つ「サバのみそ煮」

子どもたちが描いた末永先生の似顔絵

リクエスト献立魅力

木町通小の給食は、ドライ方式を取り入れた自校給食です。各学年がリクエストしたメニューから人気のものを献立にする「リクエスト献立」も魅力の一つです。

特に人気があるのは、サバのみそ煮などの和食です。

栄養士の末永律妙先生は「食べる人のことを思って作っているという強い気持ちは、絶対に負けないよ」と笑顔で話しておりました。給食室から漂うおいしいにおい。毎日届く給食のおたより。わたしたちも給食室の先生方に感謝し、食べることの喜びも味わいたいです。

文・上田祥子、志賀優美子、遠藤優海（卒業生）

言い隊

■ 公共の場 マナー守れ ■

公共施設の使い方がよくないと感じることが、最近よくある。

地下鉄に乗ると、優先席に若い人や子どもが座り、お年寄りの方など座るべき人が立っている。車内では携帯電話を利用してはいけないはずなのに、平気な顔で電話やメールをしたりしている。それは「自分くらいなら、だいじょうぶ」だと思っているからだ。

もし自分が不自由な思いをしていたら、どう感じるだろうか。だれにも席を譲ってもらえなかったら、どのような気持ちになるだろう。何げない行動によって、人を悲しませてしまうこともあるかもしれない。一人一人が親切な気持ちをもって周りに目を向けるべきだ。

（卒業生・櫛岸雄太）

■ 心地よいあいさつを ■

学校へ行く時、マンションのエレベーターで一緒になる人は、笑顔でぼくにあいさつをしてくれる。ぼくもあいさつを返すのだが、相手の顔を見て言うことができない。恥ずかしいのだ。

大人の人でも、少しだけ頭を下げて…ま～す」としか言わない人や、口さえ開こうとしない人がいる。

あいさつをするのとしないのとでは、交わした後の気持ちが全く違う。「人と会ったときは、あいさつをする」。当たり前のことのようだけれど、実はとてもすばらしいコミュニケーションの入り口なのだ。

みなさんも相手に心地よい風を吹き込めるよう、心からあいさつをしませんか。

（卒業生・細川聡一朗）

編集後記

本当にぼくたちに新聞作りができるのか？という大きな不安を抱えながらの、名前の通り「どきどき」の紙面作りがスタート。卒業記念の一環として臨んだため、木町通小の魅力を伝えたいという思い入れも強かった。

取材や調査などの活動をしていくうちに、新聞記者になったような気分になり、楽しく力を合わせていくことができた。

実際に外へ足を運んで情報を得ることは、とても新鮮だった。何度も記事を書き直したことはとても大変だったけれど、新聞作りを通して一つのものを友達と作り上げる喜びを感じることができ、小学校生活最後で最高の宝物になった。

〈編集委員〉菅野創太、田口大貴、遠藤伝、井上栗穂、櫛岸雄太、阿部由弥、井上敬貴、上田祥子、遠藤優海、北畠寛之、佐藤聖莉、志賀優美子、鈴木匡兵、中野杏香、細川聡一朗（卒業生）

題字デザイン　上田祥子、中野杏香、井上栗穂（卒業生）

〈担当教諭〉大宮知佳（現宮教大附属小）、残間孝男

次回（5月26日）は旭丘小（仙台市）と大塩小（東松島市）です。

新聞作りに参加する小学校を募集しています。申し込みや問い合わせは河北ＮＩＥ推進事務局022（211）1331へ。